

なんか予言の書が届いたのでGG0頑張ります

アイザック

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

原作が何故か本で届いた少年の話

# 目次

なんか来た話	1
外に出る話	4
割と簡単な話	7
ストーリーカーの話	11
虐めたくなる話	13
ぴーけーの話	16
ちゃんと読んだ話	21
始まりの話	25
チビな話	30
バーバリア・・・アマゾネスの襲撃	36
アマゾネス討伐―無策の突撃	42
リアルの話	47

## なんか来た話

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

「おれは ゲームをしようと部屋に入ったら

マシンが新品になってその上にダンボールが置かれていた」

な… 何を言っているのか わからねーと思うが

おれも 何をされたのか わからなかった…

簡単に言うとなんか俺のゲーム機が新品になった上何十万もする高性能機になり、ついでに中にガンゲイルオンライン全書と書かれたよく分からないライトノベルがはいっているということだ。

ガンゲイルオンラインは知ってる、今まさにアカウント作って始めようとしてたし。その為にアミュスフィアを仕入れてワクワクしながら帰ってきたのになんか進化してた。

ガンゲイルオンライン全書読んでみたらネットで有名なプレイヤーの名前が乗っててなんかもう。弾丸切ってる奴がいたり、1人で数十人倒してる奴がいたり、エンジョイ勢を自負する俺からすると化物のようなプレイをする奴らの物語が載っていた、読み終わってあらすじを読むと、

この本は未来を示す予言の書である。これを読んだ者は世界を掻き回すことに尽力すべし

意味が分からなかった。もうまぢ無理ゲームしよ…

少年は、考える事を辞めた…

「おお…めっちゃ無機質な街並み…」

割と殺伐としている世界観なので街はなんとなく暗い感じ。灰色の世界？

自分のアバターを確認する、チビだった。真っ青な髪に同じ色の瞳、可愛らしい顔立ちで、シヨタコンの人気を一心に集めそうな見た目である。青色は好きだから問題ないけどチビキャラかあ、恥ずかしいな。

とりあえずチュートリアルだ、VRのシューティングゲームは初めてだし。幾つか習おう。

チュートリアル画面に移行し、射撃訓練場をタップする、すると視界がじわじわと切り替わり数秒程で広大な射撃訓練場に移動した。

目の前に並ぶ銃器の数々、実を言うと俺は銃に詳しくない。どれがアサルトライフルでどれがサブマシンガンで、と言う区別ぐらいはつくけども、名前や特徴に関してはおろくに覚えていないものは無い。有名なM4のフルネームが言えない程だ。

M15a・・・なんか？

AKが頑丈で壊れにくいけど反動がでかいとか、そんな事ぐらいしか知らない。

まあ、やってみよう。最初はスナイパーライフルを試して見たいな。どんなゲームでもお高いから死体から拾って使うことが多いんだ。

この銃はなんだったかな、確かドラグノフ？射程は800メートルらしい。

初めて直に触る銃器の感触に興奮してきたけども、このゲームでは落ち着かないと弾が当たらないそうなので意識的に深呼吸をする。

500メートル地点に固定されている的をみやり、ドラグノフをもってレーンに移動する。

昔から射的は得意だったんだよなー、

がっしり構えて、スコープを覗き、的の頭より少しばかり上を狙う。落ち着くために、深く息をすい、吐く。自分で落ち着いていると判断しそして

引き金に指を掛け、引いた。

ターゲット！

少しばかり力の足りない音を出し狙撃銃が弾を排出する。

その銃弾は自分の予想よりも下に落ちなかったようで、頭の上部、髪が生え際当たりを貫いた。

「あれ？なんかさつき変な円が出てきたな、バグか？」

この少年、秋沢 藍翔（あきざわ あいと）、プレイヤーネーム「ア  
オハル」は、バレットサークルの存在を知らなかった・・・

## 外に出る話

スナイパーは1発で決められて嬉しかったが、よく分からないバグに襲われて混乱している。

いや、バグじゃないかな？照準的なものかもしれない。スコープは既についてるんだけど。オートエイムとかかな。

設定画面を操作してみるも、何処にもそんな表記はない。しかしそれらしきものは発見して、

「バレットサークル・・・？」

簡単に言うと、心拍数で範囲が増えたり減ったりする照準らしい。その範囲の中にランダムで飛んでいくそうだ。

「んだよこれ、クソ簡単じゃん、静かにして真ん丸な照準合わせて撃つだけとか楽過ぎね？」

それすらつまづく人も居るのですが、曲がりなりにも多くのゲームを経験してきているアオハルからすると、イージーモードのよう。

なんとなく氣勢を削がれたけど、まあ他のも触るか。

アサルトライフル―AK―47

サブマシンガン―MP5

マシンガン―M60

ショットガン―M870

ハンドガン―デザートイーグル

各系統1つずつ、有名所を触っていきました。

主観では、スナイパーとアサルトライフルとショットガンとハンドガンが得意だな、サブマシンガンが他ののに比べて射程と精度が不安だし、マシンガンはどうも金がかかりすぎるらしい。それに弾幕張ったりは好きじゃない。無駄弾だし。

とりあえず、最低限やり方は理解した。何時までもやってられないしそろそろ出ようか。

外で、ステータスを強化する。

いくつかのステータ스에 포인트を振り、上がった能力値でまたレ

ベルを上げに行くようだ。

自分の感覚で適当に筋力と敏捷に振る、武器を持たなきや意味が無いし、足が遅くて蜂の巣にされるのもゴメンだ。2つを重点的に上げることにしよう。

街に出て中古ショップに入る、コレもチュートリアルのうちのように今は道案内の矢印が出ている。

初期資金は1000クレジットだけど、買えそうなのはリボルバーしかないな、とりあえずとにかくごつくて威力高そうなのこのウェブラー・リボルバーつてのにしよう。ちょうど1000クレジットで弾120発付きの安売りしてるし。

店員に金を渡し、リボルバーを自分の手に受け取る。今この瞬間からこの銃は俺のモノだ。そう考えるとなにやら嬉しさも湧き上がってきた。まあ弱かったら売るけど。

フィールドに出るか、お金も無いし。

テクテクと、荒野を歩く。周囲に人影はないし、遠くは砂煙で見えないので狙われたりはしないと思いたい。このゲームPKありなんだよな。

「・・・ん？なんか・・・」

なんか、見えてる？ちつこい障害物。砂煙でよく見えないけど、誰か座ってるように見える、ピンクっぽい。そしてその向こうから3人組の男達が歩いて来ていた。距離にして約15メートル。気が付いていてもおかしくない距離であるが、談笑に夢中なのか気にも留めていないらしい。

「おーい」

そう声をかけようとした、その瞬間

バツ！とそのピンクの固まりが飛び上がり、手に持っている何かを振り上げて男達に突っ込んだ。

タタタタタタタタタッ！

いささか軽い音、サブマシンガンだろうか。無防備な男達に赤い被弾エフェクトが浮かび上がる。そして直ぐに沈黙した。



瞬く間に3人のプレイヤーを殺したソレは、男達の死体を漁り、直ぐにまた何事も無かったかのよう荒野をてくてくと歩き出した。どうやら俺はまだバレていないようだ。彼我の距離は100メートル弱と言ったところか？すぐ側に居た男達が気が付かなかったことを見るに、俺は存外目がいいらしい。君子危うきに近寄らずとは言うが、なんとなく気になるので付いていこうか。

## 割と簡単な話

ずっと見ていて分かったことは、あのチビはプレイヤーで、中々強いらしいという事だ。余りに早い動きに咄嗟に動けず殆どがやられ、なんとか絞り出した弾は全てチビの残像を撃っていた。

2〜3人の団体を次々屠り、また座り込むピンク。自分がバレないと分かっているという戦法を取っているようだ、俺は偶然にも気が付いたけど。というか、もうついて行くのも飽きたし終わらせようか、隙だらけだし、良いアイテムでも落としてくれるのを祈ろう。

じいっと、動かないチビ。やはり俺には気がついていないか。

ならば死ねえ！発射！

静止目標なら、この距離でも届くだろ。見た感じ敏捷重視っぽいし耐久しよぼそう。

そう思い放った弾丸は、狙い変わらずチビの額に被弾エフェクトを撒き散らし、チビは死体となった。ついでに武器をドロップしてた。

うわ、ラッキー。ちゃんとしたメインウエポンじゃん。なんだっけコレ、P90？割と見た目とか好きな銃だわ。サブマシンガンだけど、てか武器落とすとか運悪いなーあの人。

経験値とクレジツトも中々貰えた、ステータスをまた強化し、クレジツトを確認する。無一文から一気に小金持ちだ、いやどれぐらいのお金が知らんけど。2万クレジツト程ドロップした。コレなら安いメイン武器買えるんじゃないやね？俺サブマシンガン嫌いだしP90売っちゃまって足しにするかなー。まあ、リボルバーよりは使えるだろうからしばらくコレで稼ごうか。

ここはモンスターが少ないので、もう少し奥に進んでみよう。確かに単独行動するモンスターが出るエリアだし。

先へ進むと、キモイフォルムの鳶人間？が居た。現実には居たら確実に銃弾は通じないだろうというレベルの鳶具合だが、それはゲーム。手に持った拳銃を放つまもなくサブマシンガンの強み、連射速度によって蜂の巣にされポリゴンとなった。

P90、反動も大きくないし威力も、多分低くはない。強みと言えば弾数の多さだろうか。まあ普通にいいと思う。

少なくとも6発しか撃てないリボルバーよりは遥かに優秀な武器だ。

あー、やつぱメイン装備があると違うなあ。軍隊の人とそこらの暴力団ぐらい戦闘力変わるもんな。

あ、弾がない。2体目の鳶人間を倒して気がついたことはそれだ。マガジンはドロップしてないんだった。もう数発しか残ってないだろう。

仕方がないので、3体目のモンスターに適当に残弾をぶちまけ、リボルバーに持ち替えて1発1発丁寧に当てていく。1発当たりのダメージ量は、やはりリボルバーは圧倒的だ。実際は所詮拳銃弾だしそうでもないと思うけど、ゲーム的にリボルバーは当たれば強い、と言う位置付けだ。そして相手はNPCで、動きも鈍いので次々当たり、半減していたHPを2発で吹き飛ばした。急所なら1発らしいけど相手の弾も飛んで来て、しかも拳銃、ついでにリボルバーな現状そこまでの余裕はない。気が付かれてなかったら撃てる位だろう。

4発で倒せるとして、残りの弾は123発。コイツらならないと思うけど外す可能性を考えて30弱位しか倒せないのか。稼ぐのは厳しいなあ。

バアンバアン。

そろそろ飽きたな。飽き性なんだよね。同じ武器ばっか、同じ敵ばっかだと本当に飽きるわ。そろそろ残弾も少ないし帰りを考えてもう終わるか。

そう判断して最後の鳶人間を倒す、すると持っていた拳銃をドロップした。

「おお、拳銃じゃん。どれどれ?」

ルガーP08（ドラムマガジン）

外付けマガジンによって脅威の装弾数32発を誇るドイツの古銃。  
9mmパラベラム弾使用

おお、いいねコレ。なんか古臭い感じ好きだわ、でも今は故障してないけど、将来的に大丈夫かな？めっちゃ脆そう。ホコリとかクソ弱そう。まあでもゲームだし大丈夫だろ。

弾は今詰まってるだけの32発らしい。嬉しい事も合ったし、そろそろ本当に帰るか。

来た道を引き返していると、何やら向こうから土煙が近付いてきていた。なんだアレ、変なモンスターか？

とりあえずリボルバーの方を構えて撃つ、避けられた。ムキになって残りの弾も撃ち尽くすが、やけに素早いそいつに連射の効かないリボルバーは当たるはずもなかった。

そのナニカは俺の横を通り過ぎ、突然急ブレーキを掛けて止まる。あ、コイツさつき殺したピンクじゃん。

と、呑気に構えていると銃を向けられた、コレはUZIってやつかな、多分。

「居たーーーーー!!」

「うおっ」

すっげー大声で叫ばれた。耳がいてーよ。そんなにPK根に持ってたの？これ殺されるかもしれん。P90返すので許してください。

「ピーちゃんを返して！返してくれたら殺さないであげる」

ピーちゃん・・・？P90・・・？ダセエ・・・

返すのはやぶさかではないが、素直に返すのもどこか引つかかる。何か手は無いのか・・・

「見た感じ初心者だね？もうリボルバーの弾は入ってないだろうし、ピーちゃんを私を撃とうとしてもそう簡単には当たってあげないよ。」

もう？撃ち尽くしたんだよなー、あ、俺今ルガーあるじゃん、コレで行こう。

まず、P90を出す、下に銃口を向け、引き金を引くが弾はでない。俺に武器が無いということのアピールしているのだ。次いでリボル

バーを右側に向け、また引き金を引く。さつき全部撃つたので弾はない、そしてリボルバーは弾を入れるのに時間がかかるので、この場面です詰め直すのは自殺行為だ。

「俺はもう武器がない。P90を渡してから腹いせに殺されても困るから、マガジンを抜いてくれ」

分かったと返すピンク。カシヤンと音を立てマガジンを捨て、俺の見る限り体に付けていたマガジンも落とす。武器無し（に見える）とは言え簡単に武装を解除するとは、よほどの銃が大事なようだ。

・・・コレからやろうとしてる事を考えたら、相手が女の子のアウトリーな事もあって嗜虐心が煽られるな、ゾクゾクするわ。

「ほら、コレで良いんだろ。弾は適当に撃つちまったけど銃には何もしてないさ。中々良い銃だったぜ」

「！そうでしょ！ピーちゃんは凄いやねえ〜」

うん、そして死ぬ。愛銃が帰って来て喜んでるピンク、意識が散漫になっていて俺が後ろ手にルガーを掴んだ事に気がついていないよう。

流れるように銃口に向け、逃げられる前に殺してやる、

パツパツパツパツ!!

胴体2発、手に1発、首に1発。

えっ？と言う顔のままポリゴンと化し、消えるピンク。

ぶぎゃー

まだ所有権が移っていなかったP90と、ついでにまたもメイン装備であるUZIを落として言った。また経験値とクレジットも貰えたし、美味しいです。

今回の戦利品は、武器はルガーとP90、UZI。クレジットはモンスター狩りも合わせて5万程。多数の経験値。

出費は90くらい撃った弾丸かね。数百、千幾らで補充出来るくらいだ。大戦果と言っていい。

さあ、またアイツが突撃して来るまでに街に入ろうか。

そう考え、足早に街に向かっていった。

## ストーカーの話

街に入り、そそくさと最初に入った銃器店を訪ねる。

「UZ Iの弾と、9mmパラペラム弾?を下さい。あとUZ Iはマガジン付きで、300発、9ミリは200発くらい」

『パラペラム弾と言う弾丸は存在していません、パラペラムの間違いでしょうか?』

NPCの店員にそんな事を言われた、あ、間違えてたか恥ずかしい。『なお、UZ Iの弾丸と9mmパラペラム弾は同じ物です。合わせて500発ということでしょうか?』

とも言われる、俺何も知らんな。まあ一緒なら楽でいいか。

500発購入し、店を出る。P90は一応、返す気はあるので使わない前提だ。弾が案外高かったし。UZ I?貰うよ戦利品だし。

ドラムマガジンを6つと残りは全部UZ Iのマガジン。ハンドガンの引き金を引きまくる感触が好きになったので多めに持っておく。店を出た後はまたフィールドに。メイン武器が手に入ったので少し難易度の上がったフィールドに出る。しかし、

「・・・くそつまんねえな」

モンスター狩りは新鮮味が無く、かと言って何もされていないプレイヤーをキルしに行く程行動的ではない。え?ピンクの奴は2回もキルしたじゃんって?それは・・・アレだよ、なんか弄りやすかったから・・・

ええと、モンスター狩りだったか。詰まらないのは1人なせいもあるか、敵見つけたら殺してリロードしてまた殺す。UZ Iの性能が分からないからとホントに少しだけ上のマップに来たのが悪かったのか、単純作業の繰り返しになってしまった。

またも拳銃がドロップ、えーと、名前も出ない売却用の銃だそう。パーツ分の値段が出る。これを売り店で銃を手に入れたり、金策でコレを探している最中に銃本体や設計図をGETして手に入れるらしい。後はリアルマネーとか。

安い銃で数万クレジット。最高級なら数千万程もするそう。まあ

高い方は各国のサーバーに数十程度しか発見されてない超絶レア銃。難易度激高いボス討伐なんかで手に入るらしい。勿論、店売りのUZIなんかで手に負える相手な訳は無いだろう。弾も中途半端な量だし。全部急所にぶち込めば倒せるかな、まず射程内に収めるまでに3回ぐらい死にそう。

「んー、帰るか。今日はもう終わろ」

道中特に何も無く、無事街に帰った。

街は相変わらず灰色に見える殺風景な様子だが、今日1日遊んでみてこの見た目だから良いんだな、と思えた。

ログアウトしよ

メニュー画面をスクロールし、ログアウトだ。街中なので殺される心配はないし、男アバターなので変な事もされない。特に宿などを取る意味は無い。

「あああああ!?!待てええええ!!」

ログアウトする寸前、そんな声が聞こえたのは恐らく気のせいだと思ふ。

突然だが、俺こと秋澤 藍斗は大学生である。中の下程度の地元高校を卒業後、これまた中の下位の大学を受験し無事合格、特に夢は無くただ単位を取るために大学に通うだけだ。

大学内の友人は少ないが中高生時代の友人は数多く居て、特にコミュ障という訳でもない。まあ、そろそろみんなもキッチンとこれからの人生を考える時期で、遊びに出る事も無くなりはしたが。よって暇な時間はゲームに費やされる。

という訳でまたゲームをしている訳だが、どうにも困った事態に陥っている。

原因は、俺の腕にへばりついているこのピンクのチビだ。

## 虐めたくなる話

数分ほど前、ログインした俺はいきなり体に衝撃を受けた。出処を探ってみるとそこにはピンクのチビ、ではないな。フードで体を隠したチビが俺の体をガツチリと掴んでいた。ハラスメント警告が出ているが押しでもいいのだろうか？聞いてみるか

「ハラスメント押しでいい？」

「ダメですー！」

チビは大慌てで体を離し、その後やはり捕まえていないと不安なのか腕を掴んで来た。女からの判定は甘いようで今度はハラスメントは出ない。所で傍から見れば小学生カップルの様な見た目なのだが分かっているのだろうか？まあコレは役得だからいいか。

話を聞いてみると、どうしても俺の事をどうにかしたくなって最終ログアウト場所であるここに陣取って居たようだ。見事に網にひっかかった形だ。

「そんなに返して欲しかったのか」

「あんまり人気無いのか近くの店探しても全然売ってないし・・・ああっ」

ストレージからP90を実体化すると憐れな声を上げて反応するチビ。

それを持ち上げてびよんびよんすると同じ様にびよんびよんして取り返そうとして来る、まあ今は俺のだから取り返すってのは変な言い方だけど。

そろそろ仕掛けて来るな

バツ！と急加速し銃を奪おうとして来たチビに対し同じぐらいな体格なことを活かしてみたいっばい後ろに体を倒して回避する。動きを止めて震えていたチビだったがシュバババババ！とやたらめつたら手を伸ばし続ける。

恐ろしく速い動き、俺でなきや見逃しちゃうね。

速さは圧倒的に負けているが、相手の素直な性格の表れなのか動きが単調で読みやすい。見てから回避余裕でしたって奴だな。



長く格闘を続けていると、遂に動きを止めた。フェイントか？と考  
え油断をせずに身構えていた俺であつたが流石に俺がひねくれ過ぎ  
ていただけの様だ。

簡単に言うとは超涙目だった。もう泣きますって感じ。おつとやり  
すぎたか？いやまだ行ける（ゲス顔）

「あー、悪かったって、ほら返すよ」

片方を掴み、チビの前に差し出す。チビはチラツと俺の顔を伺う  
と、おずおずと手を出し、ひよいと軽い感じで手を避けた俺に向かっ  
て殴りかかつて来た。

「うにやあああああああああああああああ!!」

「痛い痛い痛い」

しばらくされるがままになりました。

「ほら、なんでも奢るのから機嫌治してくれよ。ほとんどお前の金だ  
けど」

ギロつと睨まれ肩を竦める。当たり前の様に嫌われている。

あの後今度こそちゃんとP90を返し、お詫びと称し喫茶店へと連  
れ込んだ。なんかいやらしい言い方だけど別に変な事する訳じゃな  
いぞ。一応ちゃんと詫びるつもりだ。なんか反応が気持ちよかつた  
からついやり過ぎたんだよ。

「・・・苺のパフェとミルクティ」

ほほう、かなりの物を頼まれるのも予測していたが中々の人格者で  
いらつしやる。リアルで幾つなのかは知らないけど出来た人物だ、話  
した感じ若いと思うけど、30以下かな？ネカマは出来ないから30  
以下の女の人ってことか、素晴らしい。可愛いかわからないけど。

「あと、お前じゃなくてか・・・レンだから」

「おお、そうか。よろしくカレンちゃん」

「!？」

言い直したところから考えてカマを掛けてみたがどうやら当たりの  
ようだ。脇が甘いな。ゲーム慣れしてないようで。でもゲーム慣れ  
してなくてあんなエげついPKかますのはパネエっス、流石っすカレ

ンさん。俺なんて小規模なものならともかくPKなんて大事までやる勇気ないっすわ。

あ、PKK（プレイヤーキラーキラー）は別。

「ゲーム内でリアルの情報出すのは危険だよ、もっと注意して過ごさないと悪い奴に家とか特定されるし。外の家の外の風景とかどんだけ仲良くなった人でもネットの人なら見せたりしちやいかんぞ」

「今まさに悪い人にいじめられたりした所だよ」

くうー、冷たい目線にゾクゾクするぜ。

「いやほら、オンラインゲーム初心者にゲームの醜さを教えてあげようとな。ガンゲイルは完全に俺が初心者だけど」

「・・・根っこの方から悪人だね」

「PKには言われたくない」

うっ、と呻いたレンとやら。一応悪い事である自覚はあるらしい。いやまあ、それにペナルティとかないPK推奨のゲームだけどね？ やっぱ率先してやる人は少ない。恨みも買うしね、

レンちゃん曰く、モンスター狩りするよりも楽しいし、儲けも多かったからだそう。そりやそうだけどね。丁度いいじゃん、仲間が居れば俺も心置き無くPK出来るわ。罪悪感減るし。

よって俺はこう提案した、

噂のPKの主犯として被害者の前に引きずり出されなくなかったら俺に協力しろ、と。

## ピーケーの話

「わわわ私がPKをしてたなんて全員に証明できるはずが・・・」  
「まず他のプレイヤーが気がついて居るPKの情報について話すと、小柄、ピンク、素早い、武器は恐らくP90」  
「武器までっ!？」

此処が寂れたNPCの店で良かった。バレるところだったわ。

別に武器を特定するのは難しい事じゃない、銃声には特徴があるし、そもそも目視した奴だつて居るはずだ。

そう話すと、レンちゃんは顔を青ざめさせた。

「まあ、だから、直接何も言われてなくても怪しまれはしてたんじゃないか？小柄だし、街にいる時なんかフードしてるし。んで、俺が提案するのはPKはきっぱり諦めてモンスター狩り一緒にやろうぜ？つて事。いや、やっぱ1人だとあんま楽しくなくてさ、PKはリスクあるし手1だしずらかったんだよね。それにこのチビアバターだと何となく敬遠されるみたいでさ。パーティ組んだりしてくれないんだよね。だから丁度いい相手が居たなーって感じ」

そう一気に言い終える、だがまだ迷っているようだ。まあそうだよねっさいさつきまでさんざん意地悪してきた相手だし。ここでダメ押し

「まあ無理にとは言わないよ。でも悲しいなあ、知り合いが晒し者になるなんて・・・」

ああ・・・とまたも涙目になり、レンちゃんは首を縦に振った。  
仲間確保。

P90を抱えてニマニマニコニコしてる姿を見るとまた奪い取つてやりたくなるが、努めて我慢する。流石に今度こそガチギレが入るだろうから。

俺ことアオハルは新規スコードロン

「スーパークラブ」

を作った。レンちゃんはなんか他の人とスコードロンを組んでい

るそう。誰だろ。

スーパーカブと言うとオジサン達ならガソリンの古いバイクを思い浮かべるかも知れないが、そもそも「カブ」と言うのは、猛獣の子供、という意味で、小さくても力一杯！と言う意味合いを込めてバイクに命名されたそう。

チビアバターには丁度いい名前だと思う。今日の目的はモンスター狩り、しばらくは二人がかりで金策やドロップ狙いで狩りをして、主に俺の装備を整えさせてもらう。店売りUZIはしよぼ過ぎるんじゃない。

はい1週間経過。グチグチ言いながらも手伝ってくれるレンちゃんマジ天使。お礼にまたドロップしたルガーをプレゼントしといた、これめっちゃ楽しいよ？

この1週間狩り続けた成果は、20万弱のクレジットとプレゼントしたルガー。残りのドロップは全部売った。拳銃しか出なかったわ。でもなんか・・・ドロップ率が良いんだよな。俺もまあリアラックある方だと思うけど、レンちゃんがゲーム内で運に振ってるらしいからそのお陰かな？一つ一つは大した値段じゃないけど割と馬鹿にならない程にお金になった。3万位は拳銃で稼いだかも。

んでまあ、クレジットは半々に分配。今は俺の新武器を探しに来ているところだ。レンちゃんも現実では花の女子大生(3日くらい前にポロツと言った)な事もあって銃には詳しくないようなので1人だ。

最近ずっとレンちゃんと行動していたせいかわ何となく新鮮だ。と言うのも同じ大学生であり、割と暇な時間が被っている。特に単体行動にも旨みはないし、レンちゃんもずっと付いてきてくれていた。さらにレンちゃんのクレジットを俺が奪い取った関係もあって懐事情は似たような物だ。レンちゃんはP90から浮気するつもりは欠片もないようで、『5万までなら貸してあげるよ』との事。有難いけどなんか罪悪感出てきますわ。俺PKしたし。

この1週間で随分仲良くなれたと思う。出会いは最悪だった筈だ

が何故か。

まあ悩みの相談聞いてたりしたら懐いてくれた感じだ。悪い男に引っかかりそう（おまいう）

主に高身長なせいで辛いと言う話ばかりだったが。リアルの話出しちゃ行けないって言ってるのに、レンちゃん次々出してくるよね、天然なのかな。まあネットの見ず知らずの人であるからこそ愚痴れることもあるんだろう。真剣な悩みのようなのでコチラもそれなりに対応した。

つと、話がズレましたな、とりあえず軍資金は貸してもらったのも合わせて20万。レンちゃんの武器P90はなんと25万のらしい。レア装備らしいしそんなもんなのかな？まあ、それに劣るとしてもそこそこのアサルトライフルが買えそうだ。UZ1の射程心許ないし。スコープないから安定して狙えるの100無いくらいなんだよね、それもバレットサークルに頼り切って。

引き金を引いている間はバレットラインが出続けるらしいし、相手にバレていいことは無いだろ。頑張って武器自体に付いているアイアンサイトなんかを活用しようとしている。でも動いてる奴を狙うのはまだまだ難しかった。

マーケットや店を回るがこれと言った物に巡り会えない。と言つてもルガーなんて言う他の人が持つてるのを見た事がないキワモノを使っているのだからメインもちよつと特殊な物を使いたくなかったのが原因だ。普通の銃ならそこらじゅうにある、ダジャレじゃないよ。

中々見つからないキワモノ銃に少しだけ落胆しながらもまだまだ存在する店達を見て回る。

すると類は友を呼ぶと言うのか、特殊な武器を扱う人が多い区画に到着したようだ。普通の武器もあるが、今までよりも断然特殊なものが多い。銃口がいくつもついたりボルバーであったり、シールド・ガンなんて言う古い盾もあった。一応撃てるらしい、が高い。盾持つて弾を弾きながら接近して殺すとかロマンだけど内容見てみるとただの鉄製だから貫通しそう。

しっかし何でもかんでも高いなあ。まあホントに欲しい人は実用性度外視で買うからこそこの値段なんだろ。

ネタ銃、ロマン武器、各種様々なものが置かれているが、流石にネタすぎる、ロマンすぎる。ちよつと変な見た目でもしてりやいいな、位のにはわかネタ愛好家にはまだ早い領域だったか。

そう思い、もう帰ろうかとした時1つの銃が目に入った。

13万クレジツト

武器種（アサルトライフル）

M x 4（セミ・フル切り替え可能）

そんな表記。まず気になったのが安さ。アサルトライフルでその値段はかなり安い、かと言って骨董品のようなものには無いし、新しげな見た目だ。その見た目がちよつと特殊なのも評価のポイント。

次にサイズ、かなりコンパクトだ。全体的に細いし。

最後にその銃の内容

M x 4

イタリアで作られた9×19mmパラベラム弾を放てるC x 4の派生モデルの小銃。射程は落ちるが持ち運びなどは楽。元はサブマシンガンとして作られた。

9mmも放てる、これは重要だ。俺の持っている武器の弾薬は今のところ9mm・・・パラベラム？のみ。武器を色々持ってきた俺からすると使用弾薬の固定化は必要な事、こらそこ、普通に1つに絞れなんて言わない。

何故こんなにも安いのかと店主に聞いてみると。

人気が無いから、その一点だけだった。これは売れると思いつ入れたのは良いものの射程威力で純アサルトライフルには劣り、制圧力でサブマシンガンに劣り。器用貧乏と言えるこの銃を買う人は居なかったそう。

俺が購入の意思を告げると店主は喜び、安値でマガジンも付けてくれた。有難い。そう言えばUZIはどうしようか、売っても所詮量産品の店売りらしく1万クレジツトにも届かない。中古だし。一応

持つとくか、万一この武器をロストしたら面倒になるし。

掘り出し物を見つけた俺はほくほく顔でレンちゃんと合流するの  
であった。

## ちやんと読んだ話

「げふっ」

ゲームを終えリアルに戻った瞬間、腹に衝撃が走った。なんだよアミユスフィアを外して正体を確認する、そこにあったのは本棚にしまったはずのガンゲイルオンライン全書とか言うアレだった。

本棚から2メートル位はなれてるしどう考えても自然に落ちて来たものではないのは明白だ。神的存在に催促されているのかもしれない。こわ。

仕方が無いので読んでみる。するとびっくり、なんかレンちゃんGGOLライフを書いた作品が載っていた。前見た所はキリトとか言うSAO生還者で有名なスケコマシ野郎がなんかやってた所、そこで読むのやめたけどすっかり一つ一つのあらすじを読んでいくとレンちゃんが出てきたのだ。びっくりですわ。さらにびっくりするのがPKやらP90使っている事やら、そんな事が書いてあるのに俺の存在が出てきていない事。もしかしたら俺は世界のイレギュラー的存在なのかもしれない。SAN値がピンチですなあ、そんなに気にしてないけど。

全書まとめ

ピトフーイには気をつけよう、反感買うと殺されちゃうゾ。

という事ですね、はい。まだ少ししか読んでいないけどアイツがとんでもなさげなやつだったのはわかった。でもまあ、変なことしなけりや無害だろ、ほっとこ。それよりもスクワッド・ジャムとか言う心躍る大会の事だよ。レンちゃんに組んでもらって出よう。エムとか言うサイコ巨漢が出てくるらしいけどさ。

昼飯を食べてからログインすると、レンちゃんからメッセージが届いているのに気が付いた。

「レン」アオハルさんに会って話がしたいって言ってる人が居るんですけど、時間空いてる時ありますか？

レンちゃんの交友関係から察するにピトフーイかエムだな、丁度い



い。

「今からでも大丈夫?、と」

返信はすぐに来た。地図情報も付いていてここに集合だそう。近かったので直ぐに付いた。

「やあやあ!君がアオハル君ね?さ、座って?」

ピトフリーさんテンションたつつかいっすなあ・・・

寡黙なエムを見習ってくりやれ。この人もなんか変な人だったけどさ。

「あー、どうも。アオハルです。んでなんか、話があるとかで?」

「ええ、そうよ。君、スクワッドジヤムって知ってる?」

タトウーを入れた顔に微笑みを浮かべ、そう聞いてくるピトフリー。性格知ってても裏なんてなさそうな顔だ。なんの情報も無かつたら普通に良い人認定してたかもしれない。

「あー、はい。知ってますよ。出てみたいなー、って思っていました」

「なら話が早いわね、実はレンちゃんに私の知り合い、このデカいのね。エムって言うんだけど。2人で出てみない?って誘ったら自分のフレンドも誘って良いですか?って言われちゃってさ。レンちゃんに頼まれたら断るわけには行かないよねえ」

・・・おお、この人テンション高いだけじゃなく押しが強いな。めっちゃマシニングントーク飛ばして来る。エムもレンちゃんも静かにしてるし、喋ってるのは俺とこの人だけだ。なんか居心地悪いな・・・  
「あーと、了解です。3人チームって事ですよ。んでも、自分まだ初めて一月経ってないペーパーですけど大丈夫ですか?」

「大丈夫よ、なんなら装備を用意して上げてもいいわ?」

「あ、今日調達してきたばっかなんでいいです」

そう言うと、今まで初見の人がいたからか無口だったレンちゃんが「あ、アオハルさんちゃんと買えたんですか?どんな銃なんですか?」  
と聞いてきた。よくぞ聞いてくれました。銃を取り出し説明する、拳銃弾を撃つ世にも珍しいアサルトライフル、Mx4。器用貧乏で人氣皆無。

あれ、これで説明終わったわ。

「アオハル君、その銃弱いわよ?」

「・・・辞めておけ」

「なんか・・・見た目ダサイ・・・」

めっちゃ嫌われてますやん、悲しいっすわ。エムにすら突っ込まれたぞおい。

良いんだよ、射程とか短くても。スナイパーライフル買うし。金貯まったら。全距離対応の器用貧乏プレイヤーになるんだよ俺は。

まあ部屋の隅でいじけている俺は置いといて話は進んだ。なんか大会まで色々特訓するらしい。敵との距離を測ったり、銃声から敵の情報を読み取ったり、え、俺もやらなきゃダメですか。

ダメなそうです。

めんどくさい特訓がやっと終わった、エンジョイ勢な俺にガチ目な知識の詰め込みはキツかったんですが。いやまあちゃんとしたよ? 多分。もしかしたら満足の行くレベルに到達してなかったかもしれないけど。そう言えば射撃訓練で引き金に指かけずに狙ってたら驚かれた。中々練習する人が居ないらしい、まあバレットサークルって言う便利道具あるからね。敵との距離が離れるとメートル単位で弾が落ちるから狙うの辛い、スコープに距離計とか付いてるから頑張って練習して覚えるしかなさそうだ。流石にコレは本気の本気で練習した。

そう言えば、エムからお古の狙撃銃を貰った。エム先輩流石っす、あざっす。(手のひらグリングルン)

PSL狙撃銃

ルーマニアの狙撃銃。7・62×54mmR弾使用。AK-47をベースに設計され、安定した耐久性と精度を誇る。

有効射程は1000弱?なんだとか。金はもう数万しかなかったからとても有難い。実を言うと色々武器を持っていくと言う俺のスタイルに苦言を貰ったりしたのだが最終的に折れて援助してくれた。エムはピトフィーに対してはちよっといかれる事もあるけど基本いい人なので有難く貰っておこう。

今日はスクワッドジヤムの当日だ、最後に携行品を確認しておく必要があるな。

武器

ルガーP08

Mx4

PSL狙撃銃

マチェット（体に対してデカすぎて剣みたい）

弾薬

9×19mmパラベラム弾×700（ルガーマガジン3個Mx4マガジン20個）

7・62×54mmR弾×30（PSLマガジン3個）

M67破片手榴弾×10

服装

ぬののふく（迷彩・雪迷彩・砂漠迷彩）

以上である。新しいのは手榴弾とマチェット、服ぐらいだな。マチェットはとりあえず頑丈そうなの買ったんだけど、チビアバターだとすげーデカかった。安かったけどね。服は各フィールド事に見つかりにくくする必要があつてとりあえず購入。元々紙耐久極めてるからなんの効果もない服だ。手榴弾は適当に店売りの奴を持てるだけ買った、まとめて吹き飛ばしてやりたいよね。

## 始まりの話

装備も確認した所で、集合場所の酒場へと向かう。今更ながら緊張してきた、あんまり緊張し過ぎると弾が当たらなくなってしまうので深呼吸でもしておこう。

酒場に着くと、2人は入口で俺を待っていた、俺が最後だったか。酒場の中に入る。中は、多くの野次馬で賑わっていた。

誰が優勝するのか、なんかの賭け事の代わりに大会中に撃たれた銃弾の数を当てるゲームが行われていて、中々に盛況のようだ。全書にも載ってたな、ちなみに当てた奴はいない。

大体がむさくるしい男ばかりで、女アバターは殆どいない。チビアバターなんて俺とレンちゃんとの2人だけだから尚更目立つ。誘拐だのお菓子に釣られてだの、ゲームのアバターに対して好き勝手言ってくれるもんだ。

「アオハルさん、緊張して「いいや、全く」・・・あ、はい」  
深呼吸したからもう緊張してない、OK？  
ルールのおさらいでもしておこう。

スクワッドジャムは団体戦

最低2人、最高6人のチーム戦で、最後に残ったチームの勝利だ。個人個人でB・O・Bと言う個人戦大会に参加する程の猛者は居ないが、チームプレーとはまた別物の力が必要な大会の為あまり当てにしているのではない。

最初に降りる場所は他のチームから最低1キロ離れている。

サテライトスキャンという人工衛星からの情報システムにより10分事に自チーム含め全てのチームのリーダーの場所を表示する。このリーダーのみ、と言うのがミソでチームメンバーが別行動していても分からないから注意が必要だ。

リーダーには降参する権限が与えられ、死亡した場合は指定した人物へリーダー権限が移行する。

こんなもんかな？まあ、とにかくサーチで敵殺して優勝しろって事だな、うん。あ、ちなみにチーム名はLMHだ。うーん、安直。

そうこうしている間にバトルが始まるようだ。さて、俺というイレギュラーがいても全書の通りに進むのかね……。てか全書、最終的にとんでもないズレが出るだろ絶対。書き変わった後の未来見せてくれよ。

フィールドには転移で向かう。その前に10分間だけ準備時間があり、ここで最後の点検を行う。

「装弾よし、ナイフよし、迷彩服よし、2人は？」

「私も大丈夫で・・・大丈夫」

「俺も問題ない」

うし、準備万端、敬語禁止令が言い渡されてからレンちゃんはどこか話しくそうだ。俺は割と慣れてるから詰まりはしないけどね。

最後に腰にマチェットと、手榴弾を2つ付けておく。蹴散らしてやりますかあ。

転移し最初に舞い降りたフィールドは、森。視界がクソ悪くてどうにもやりにくいマップですわ。とりあえず迷彩服に着替えておく。

「あんま射程ない武器使ってるから狭いのは有難いけど、何処から敵出てくるか分かんなくてここに籠るのは辛い気がするわ」

そう意見を出した。GGOに慣れてるらしいエムも賛同してくれ、とりあえず移動を開始する。今俺達がいるのはマップ右上の様だ。ホントに隅の方で、移動するのが厳しいような、まあ北と東は無視出来るってことだしいいか。筋力・耐久重視のせいで今一つスピードでないエムに合わせて進む。

途中、遠くで銃声が聞こえたが。西の方で撃ち合っているチームのようなので無視した、乱戦になってうっかり撃たれても困るしね。

「先に行ってくれ、俺は森でスキャンをチェックする」

「了解、レンちゃん前行ってくれ」

狙撃メインのエムを後方に残し、俺とレンちゃんで見覚的な索敵をする。もう数十秒の間に狙われないようにするためだ、っと。

『うわ、めっちゃ近くに敵発見。200以上向こう。数は5人以上確定武器は・・・マシンガンだな。なんか全員マシンガン持ってるわ。狙





ひとまず、撃たれずに居住区に入る事が出来た。しかし都市部方面から鳴っていた銃声が今既に途切れている。十中八九返り討ちにしたのだろう、いやワンチャン俺の存在のせいでバタフライ効果的に自衛隊の奴らが全滅した可能性もあるけどさ。多分無いでしょ。



## チビな話

居住区で迎え撃つ流れですネクオレハ・・・

作戦としては、レンちゃんがスーツケースの中に隠れて敵が近付いて来たら飛び出て射殺するって言う単純な作戦だね。・・・まあ、単純ではある。

もちろん俺が隠れても良いんだけど、俺のMX4は30しか撃てないから多分足りなくなるんだよね。エムは割と離れた所から指示出し、俺は割と近い所から援護。街路樹にでも登るかな。

まだスキャンまで三分はあるからなー、暇だね。

『レンちゃん、居心地はいかが？』

『すごくこわい』

だよなー、知ってた。でもホントに入れるってすげーよな、リアルは高身長で悩んでるレンちゃんからしたら本当は嬉しいんじゃないか？

俺の登った木は、葉っぱは多くて外からは見えにくいんだけど枝が細い。エムが乗ったら全部バキバキ行くだろーね。てか俺が撃つたら多分折れるね。折れますネクオレハ。

『お、レンちゃん、敵来たよ』

ガタツ！

スーツケースが音を立てて震えた。蓋パカーってなったら台無しだから落ち着きなさい、コレ言わない方が良かったわ。目算150？位の道の向こうの角から、1人がクリアリングをして道を進んで来た。

『4人が先行していて、残り2人の姿は見えない、そっちは？』

『此方も4人を確認している、と。今2人も確認した。2人組は4人の後方のバスに隠れているぞ、そこからは見えないな』

マジか、それは面倒だな。あ、スキャン来た。敵もまさか人間が道端のスーツケースに入っているとは思わず、そこから30メートル程の距離に留まる。なにやら通信をしているようだ。

『二人とも、俺はレンちゃんから見て1番後方の敵を撃つぞ。あとは

たのんだ』

恐らく4人が倒された時点で残りがりザインする事は確実なのだが、やはり俺というイレギュラーの存在によってどうなるか定かではない。念には念を入れ出来る援護はしておくべきだろう。俺がこの100ちよつと位の距離から狙撃、その後木に隠れ注意を引きレンちゃんが奇襲をかける。倒した後は破壊不能オブジェクトである死体を盾にレンちゃんは前身。エムもべつの場所でスナイパーライフルを構えている。俺は狙撃銃を置いてサイドから突撃をかけ、王手をかけるという作戦だ。スピードが勝負。

木の上と言うこれ以上ない悪条件だがバレットサークルにさえ入っていけば何も問題はない。更にスナイパーライフルは場所の割れていない初撃のみバレットラインが表示されないので外さない限り1人は殺れること間違い無しだ。敵はこちらからみてレンちゃんの左側に固まっついていて、交差点の向こう側は建物に隠れ見えないが2人はそこで待機しているのだろう。

ドオン！バギイ！ゴスツ！うぎやー！

痛いツスよ……。うう……

頭を抑えながらも木の周りの塀の下に伏せる。

パパパツ！パパパツ！と疎らに銃声が鳴り響き、周りに着弾するが直ぐにパラパララララ！と掻き消され、そしてそれも途切れた。

立ち上がり横から回り込む、路地裏に入り、そこでゲームならではの動きを見せる。壁を蹴り家の屋根上へと飛び出すのだ。これはゲームのスキル『軽業』

により可能になる行動だ、現実でそんな事出来ないのでスキルないと落ちます。

恐らく敵のいるであろう方向へと屋根を走る、未だレンちゃんは撃たれていないので多分降参する寸前なのかな？

100メートルを10秒程で駆け抜ける、足場の悪い屋根上でコレなので中々に化け物だ。多分レンちゃん5秒位で進むけど。通りのそばにある家に到着すると、双眼鏡をおろし懐を漁っている2人のプレイヤーが居た。銃も身体にかけており、完全に降参モードだ。

「悪いがオレのスコアになれオラー!!」

屋根から飛び降り大ジャンプ。え？みたいな顔の2人を視界に収めながらこのバトルに入り初めてM×4を撃った。

ダダダダダダダダダ!!

まあ当たるよね。相手は出来るだけ現実的なステータスにしててあんまり人間離れた動きもしないし、所詮ゲームだから終わり決めて気抜いてたしね。しかしまあ、コレで5キルか。なんか俺対人戦得意かもしれないな、VR以外だと普通よりちよい上ぐらいに収まるんだけども。

近くの家に入り、中途半端に残っている残弾を抜き出し、バラバラのままストレージに入れ違うマガジンを取り出す。するとレンちゃんが家の中に入ってきた。

「ナイスでし、だったね」

「いやー、メインアタッカーを追い越して5キルはやバイわー。もうレンちゃん要らなかつたかもしれないなあ」

「・・・」 チャキツ

無言で銃口を向けるんじゃない危ないだろう。

パァン! 「ヒイツ!?本気で撃つなって!」

「アオハルの言葉に良いようにされない為には脅しが必要だよね」

成長しやがった・・・、怖。足元に撃ってきてきてビビるわ。てか弾のムダ使いはやめなさい。

無言で作業に戻ると、レンちゃんも弾を抜き出しマガジンを交換していた。

・・・何となく流れに乗れない空気のまま、エムが追いつき入室してくる。

あまり意地悪を言ってやるなどやんわり言われた、こういう人間なんですもん俺。

「次はどうするんだ？確か・・・沼地の近くと、まだ遠くに何チームか残ってた筈だよな。まあ、俺は無闇に動きたくないけど」

自分の意見を出しつつ、チームで話し合う。結論としては次のスキャンまで待ち、方針を決めようということだった。全書もそんな

だっけ？そこまで記憶力無いし色々イベントの順番入れ替わってる気がするからあんまり頼りにはしないでおこう。

暇なので、ルガーでも取り出して眺めておく。

「・・・前から気になっていたが、何故そんな骨董品を使っているんだ？レンも」

「ん？ああ、コレ？まあ正直ハンドガンそんな使わないし、コレ32発も入るから乱射すりゃ当たったりするかなって。初めてドロップした物だから気に入ってるのもある。レンちゃんは俺が手に入れた2つ目を渡したただけだ。サブ武器持つてなかったし」

俺の言葉にコクコクと頷くレンちゃん。ハンドガンで狙っても、50メートルとかだからね。弾が出たらどれでも変わらんとと思う。カシヨンカシヨン部品が動くの見てて楽しいし。

そろそろ、時間だ。全員スキヤンを確認する。

沼地の一つ：アレ？後は遠くにもう1つ点が残っているだけ、もう3チームしかないじゃないか。そう考えるとちよつと緊張して来たな。部活以外で何か賞を取ったことなんて無かったから3位確定ってのは嬉しいぜ。

まだもう1チームは遠いので、沼地のチームを叩く事に決めた俺達、思い出して来たけどそう言えばコレ向こうが乗り物で奇襲掛けてきて割とピンチにたったシーンだった気がする。

街を出て沼地に向かう最中、いつ襲われるか分からずビクビクと辺りを見回していた。あ、来た。

『西からなんか来たぞ。隠れたいでござる、てか隠れる』

近くの岩に飛び込む。味方は置いていくよ。レンちゃんは避けろしエムは盾で受けるけど俺だけ何も無いんだもん。中途半端に足速いだけで紙装甲ですから。

呆気に取られている2人を尻目にPSL狙撃銃を取り出しておく、2人も敵に気がついたようでエムは盾を構え、その中にレンちゃんとエム2人で隠れていた。え、マジすか？

やっべ、ちよつと全書と乖離してる、大丈夫かな。エム行ける？俺今回は不利な条件だからうっかり死にそうです。

敵は多分5人で、空飛ぶ円盤に乗り猛烈な速度でこちらへ向かってくる。エムはバレているが、幸い俺は見えていないらしい。ラツキー。

キインキインとエムの盾（宇宙船の外壁とかなんとかでめっちゃ硬い）に弾かれる敵弾、エムの盾は扇状に広がっているので近付かれ、追いつかれると多分蜂の巣にされる。

ドオン！

ドオン！

おお！エムが2人やった！ライン無し狙撃という物で撃つ寸前まで引き金に指をかけず敵にバレットラインを表示させないという高等技術で2人やってくれたようだ。俺には動いてる敵を自分で狙うってのは無理だね。

見ていると、レンちゃんが盾から飛び出し匣を買って出ている。俺も援護しないと。

敵は狙撃された事に警戒し、方向転換しながらレンちゃんを狙っている。流石に縦横無尽に飛び回る敵を撃ち落とすことは難しい様でエムは何度も弾を外している。もちろんバレットサークルで敵を狙っても避けられるだけなので自前の力で狙っているからだ。

敵も無理な機動をしている代償に、レンちゃんを狙う銃撃は疎らで精度も低い。止まらない限りほぼ当たらないと思う。

その膠着した戦闘状況に待ったをかけるのは、俺なんですわね、はい。敵は2人に固執していて全くこちらに気がついておらず、引き金に手をかけても反応を見せない、バレットラインが見えていないという事だ。敵が固まったところを狙って・・・

はいドオン。あ、流石に無理だった。

放った弾丸は敵の腰辺りに着弾し、被弾エフェクトを撒き散らす。頭で無ければ余程の紙装甲出ない限り確殺は出来ない。更に密かに狙った操作をミスって味方とごっつんこ、も上手くいかず撃った1人は転げ落ちたものの残りの2人は未だに健在である。狙撃銃を置きMx4を取り出し、地面に落ち更にHPを減らした敵にトドメを刺

す。流石にコレは外さないね。岩陰に隠れ敵の様子を伺うが、どうも意見が割れた様子。1人は突撃して来たがもう1人は逃げの姿勢を見せている。そういうのちゃんと決めないといかんよ。

『エムー背中を見せてるアイツをぶっ殺してやれ！レンちゃんは来るやつを撃て！俺も撃つ！』

敵は頭を冷やした方がいい。逃げる方も来る方も真っ直ぐに移動している。優位だと思っていた状況からひっくり返されて焦っているのか？

ダダダ！ダダダ！

指切りで反動を抑えつつ連射する、敵も一矢報いようと銃を撃っているが安定しない空中で、それも物陰にいる俺達に当てるのは至難の業だ。当然の様に1つも当たらず、盾まで残り100メートルと言ったところで撃ち落とされ死亡する。もう1人はとつくにエムが一発で仕留めていた、流石だ。

『・・・あー、どうにか乗りきった・・・』

## バーバリア・・・アマゾネスの襲撃

ふーむ、この円盤めっちゃ軽いな。俺でも引きずればする位の重さだ。

沼地チームを殲滅した後、俺は素早くホバークラフトに駆け寄っていた。何故ならこの後最後のチーム、Sナンタラに狙撃された気がするからだ。6人チームで、確かマシンガン1人狙撃2人アサルトル3人？そんな感じだった気がするね。正直全く覚えてないけど。レンちゃんはラッキーガール自称してて致命傷は免れるかもしれないけど何かの間違いで俺に弾が飛んできたら即死する自信がある。よってさっさとトンズラこころ。

比較的全て近くに落ちたホバークラフト、1番近い奴にエムの乗らせ、その次が俺、1番遠いのがレンちゃんだ。燃料は既に3割程しかなく、あまり余裕はない。

『相手チームの方が人数が多いと予想される。居住区へと戻りゲリラ戦を仕掛けるぞ』

・・・あれ？なんか、岩のどこに行くんじゃねえの？マジかよ、完全にズレてんじやんか。

そう思うと途端に余裕が無くなる、頼りにしないとさいつつどこか寄りかかって居たのだ。ヤバい、行けるのか？それに、この後エムが使い物にならなくなるし、本格的に無理だろ。キッツ・・・

暗い予想を抱きながらも移動を開始する、幸いと言つていいのか狙撃はなかった、だがそれも全書からズレていると言う証明なので不安を拭う材料にはならない。

ポジティブな事を考えよう。未だに被弾0だ。全書よりも2人多く敵を倒しているし、2待機しているのだろう6なら3倍だが3対6なら倍、1人2キルで勝てるんだ。2キルぐらいなら今までも安定して出来るぐらいのスコアじゃないか。

俺が頑張つて気分を向上させていると、あの事件が起こる。

あのピトフーイから、「3時になったら読むように」

と渡されていたらしい手紙を読むエムの様子がおかしい、微かに震

え、そしてサブ武器であるハンドガンを取り出した。あつ  
「すまん」

ドオン！

その銃弾は外れた、寸前に察したレンちゃんが弾を避け、反対にエムへと銃口を向けたからだ。

話を聞くと、やはり全書と同じくあの女から脅されたらしい。

曰く、『SJ（スクワッドジャム）内で死んだら現実で殺すから☆』  
とんだサイコキチ女郎だ。何をどうすればそこまで捻くれるのかむしろ知りたい、と現実的なひねくれ方をしている俺の意見。

しかし、なんかこんな場面でも本の通りならなんとなく落ち着くかもしれない。

死にたくない、死にたくないとそれまでの寡黙さ、頼りがいなんかをぶち壊す勢いでうづくまるエム。まあ、本気で殺されるなんて普通じゃないしな。コイツを殺させる訳にはいかない。

「エム、お前は何処か安全で、それでいて俺達の場所が分かるようなところに隠れてろ。二人でやる」

「ええ！ホントに?!いやまあ・・・私も簡単に降参はしたくないけど・・・」

やるしかない、いや殺るしか無いつすわ。もう見 敵 必 殺つて  
言うかサーチアンドデストロイって言うかさ、まあ皆殺しですよね。  
アイツら二度と日の目を見れねえ様な身体にしてやるよ。

「なんか変なこと考えてない・・・?」

その頃、アオハルからの謎殺意を受け取ったチーム「SHINC」  
は、それを武者震いと捉えたようだ。

「あの3人は居住区へ移動した様だ、厄介な乗り物も持っているな」  
「でも多分、燃料はあんまり無いと思うよ、死体が落ちてるから多分やりあったんだと思う」

6人の女達は獲物を追い詰める為の策を練っていた。相手は3人、此方は6人だが油断はしていない。



ああでもないこうでもない意見を出し合う、そして最後には「シンプルに3・3に別れて行動するぞ、相手がどういう作戦で来るのか分からないが、罠と待ち伏せに気を付けるんだ」

『はいー』

『レンちゃん、ぶっちゃけどうすりゃいいんだろうな』

エムを通信ネットワークから追い出し2人で会話する、こういう事も出来るんやね。

今俺達は2人で別々の木の上に隠れていた。直ぐ近くに入り組んだ家々もあり、先ずはここから戦闘を初めその後は各自の判断でブツコロリーだ。あ、古い？

リーダーは取り敢えずエムに譲って来た、一応

「俺らが死んでもねえのに勝手に降参なんざしやがったら・・・分かるな？」

と言って置いたので大丈夫だろう、割とビビりみたいだし。

まあ先ずは今まで通り、俺が1人を絶対に殺す、コレをミスるだけで割と致命傷だ。その後は脚を活かしてヒットアンドアウェイ作戦、脚の速さは圧倒的に勝っていると信じた。相手のラツキーショットが無い限りは簡単には死なない筈だ、前から後ろから常に動き続けて攪乱するからね。

『スキャン来るよー』

『おう』

・・・うん、居住区の中に既に居る見たいだ。ここからは離れてる方だけど。エムはこの街の中で1番高い、時計塔に居座っているらしい。援護してくれるのか、それとも1番周りを見やすい場所で何時でも降参できるようにしているのか。まあいい、全書ではレンちゃんが1人で5人倒してたんだ、俺加わったらエムの出番とか無いに決まってるね。

『レンちゃん、出来るだけ道路の向こう側に手榴弾を投げてくれ、誘き寄せたい』

俺は戦闘のプロでもなんでもないし、心理学を学んでいる訳でもない。この作戦でいいのかは分からない。ただ今最高に好調な感じなのでまあ行ける行ける。あるじゃん、ゲームとかスポーツとかでやけに行動がうまくハマる時って。

(そう思い込みたい・・・)

人死にがかってるバトルなんてキツツイつすわ、そこに飛び込んで行ったのは自分だけどね。やっぱこんな体験なかなか出来ないなって。

軽い感じで自分を誤魔化さなければ緊張でミスしそうだ。

手榴弾が爆発し、暫くしてから。1人、サブマシンガンを持った女が索敵に来た。一瞬だけ顔を出し辺りを見回すと、顔を見引つ込め直ぐに仲間を連れ建物の陰に隠れながらこちらへと向かって来る。バレてはいないが、取り敢えずこつちを探す事に決めたようだ。まあ、さっきの自衛隊もそうだけどまさか木の枝に居るとは思わんよな。キビキビと動きこちらへと距離を詰めてくる敵だが、気になる事が。『レンちゃん、3人しかいない。多分チームを分けて虱潰しに街を探すつもりだろう。これはチャンスだ。ここで片方を、潰す』

『了解』

サブマシンガン女、赤毛のマシンガン使い、金髪の狙撃銃使いの3人組だ。

『俺が撃つたら、ここから飛び出て後ろに逃げ出すから、下を敵が通り過ぎたら飛び降りて背中を撃て、追いかけて来なかったら、俺は敵の横に回り込むから合図と共にぶつ飛ばしてやるぞ』

中々に良い作戦じゃないか？いきなり仲間を殺され、木から敵が飛び出してきた。咄嗟に狙撃銃を構えたり、機関銃を撃つたりしたとしても動揺でバレットサークルは広がる筈だ。避難場所まで10数メートルなので余程運が悪く頭を抜かれない限り死亡はない。俺リアルラックはあるんで！(フラグ)

敵との差は100メートル強、外すわけが無い。動きは機敏だが、そのペースは一定、パターンがあり狙いを付ける事は容易だ。死ね。ドオン！

戦闘を進んでいたサブマシンガン女の目の当たりから被弾エフェクトが散る、2度目の経験である俺はキチンと着地し、即座に遁走する。路地に入る寸前ぐらいに銃撃されたが、かすりもしなかった。相手も直ぐに攻撃をやめる。

『レンちゃん、来てるか』

『まだ・・・何か隠れて話をしてるみたい。・・・あ、来てるよ！』  
『了解』

別行動のチームと話し、追撃する事に決めたらしい。チョロいもんだぜ。

アイツらの速度ならまだ数秒かかる、アレ？

『バレたアアア！』

『！跳べ！』

マシンガン特有の金属音が響く、クソッ

外へと飛び出し、膝立ちで狙いを定める、レンちゃんは指示通り飛び上がった、身軽で敏捷極振りなその身体能力は半端では無く、斜め上へと数メートル程の大ジャンプだ。驚きながらも身体を逸らし撃ち抜こうとする赤毛の銃弾は虚しくも残像をすり抜ける。そして金髪女だが、狙撃銃を撃った。

タアン！

放たれた弾丸は凶らずも金髪に飛び込む形になっていたレンちゃんの足を貫き、引きちぎった！

『マジかよおい！』

焦りで照準がブレ、赤毛の急所を狙えない。当たりはするが耐久も高いようでその装甲を貫けないのだ。

弾が切れた！そしてそのタイミングでマシンガンがまたも火を噴く、たまらず俺は路地にとんぼ返りをし、即座にマガジンを交換する。

タタタタタタタ！

レンちゃんのP90だ、出るしかない

装填を終えた俺は顔を出し赤毛に向けて乱射する。立て続けに被弾した赤毛はついに倒れた、レンちゃんは！

・・・無事だ、先程の連射で金髪女を倒していたらしい。片足立ち

でこちらへと向かっている。

『直ぐにここから逃げよう。敵が来る』

『う、うん、でも私片足無くなっちゃ』

ガシツ！この際恥ずかしいだなんだと言ってられん、お姫様抱っこで戦線離脱だ。

『えちよーやめー！』

赤く染まったレンちゃんの顔はこんな状況でも人を癒す効果を持っていた。

## アマゾネス討伐―無策の突撃

「凄く恥ずかしかったんだけど・・・中継カメラ居たしさ」

回復をしながら、こちらへとジト目を向けるレンちゃん。コレは本当に申し訳ない、俺の作戦ミスが誘った危機だったのだから。

「なんでバレたんだ？」

「赤毛の人は素通りしたけど、金髪の人がふと上を見上げて目が合っちゃった」

ああ・・・まあ、もしかしたら？とか思っただけであんなあ、うん。

「いや、本当に悪い、俺の考えが甘かった」

「いいよいいよ、私なんて何も考えられなかったし」

「それな」

痛い痛い怪我人は安静にしてなさい。

そう、怪我人だ。レンちゃんの足は未だ膝下あたりから千切れて無くなっており、後1分程は治る見込みもない。かなり離れて来たのでまだ少しは余裕はあると思うが・・・向こうも警戒して慎重に進むだろうし。

どうする？復活を待ち二人で進むのか、俺が囷になるか・・・。

ドドドドドドドド！ドドドドドドドドド！ドドドドドドドドドドドドドドドドドド！

なんだ!?エムが見つかったのか!?いや、でもHPは減っていないし、降参もしていない。更にいえば銃声はさっき俺達の居た方向から聞こえてくる。そうか、木を撃っているのか。俺達が木に隠れる程小さいという情報はしつかり残りのメンバーに渡っている訳だ。さっきの場所からここまででは、500メートル程だろうか。迷わずここに向かってこない限りどうやら足とHPの回復は間に合いそうだ。マシンガンと、スナイパーと。あとなんだ？ああ、しつかり全書読んどきや良かった。

建物の窓から少し顔を出し、近くの通りを確認する。まだ居ない。そろそろスキヤンの時間だ。まだ残り全員で動いているかは分からないが。いやまあ、流石にここからさらに別れることは無いだろ

う。可能性は0では無いけども。今俺達がいる建物は鉄筋コンクリートの二階建て一軒家だ。今は二階の一部屋に籠もっている。

「ええと、アイツらは取り敢えず時計塔に向かってるみたいだな。エムは、あ、移動してる更に後退してるな」

「今度はどうするのじゃ、軍師アオハルよ」

「やめい」

エムはこのまま敵を引き付けてくれるだろ、俺らは、接近戦仕掛けるしかない。射程短いしもう狙撃銃構えてる暇ないだろ。

マガジンを身体に5本付ける。そう言えば俺全然弾使ってないな、まだ500発以上あるしき。充分足りてるわ。

さつき使った手榴弾をもう残り全部体につける。プラズマグレネードと言うゲーム内の架空手榴弾以外は、被弾しても爆発したりしないので安心して付けることが出来るが、少し威力は控えめだ。投げまくって1つでも掠ってくれることを期待してる。

1度も使用していないが一応ルガーも確認し、最後にマチェットを眺める。

(狙撃銃使いコレでぶっ殺してやろうかな)

割と過激な事を考えつつも準備を終え、レンちゃんの回復を待つ。と言ってもその後数十秒で回復を終えたので後はぶちかましに行くだけだ。

「作戦は、行ってから考えるわ」

「え?」

発見、えーと、2人?マジか。1人別行動かあ:~んー、日本人っぽい細身のキャラがいたような気がするからそいつが別行動かなあ。アイツなんだっけ武器。今居るのはゴツイ2人組で、武器はマシンガンと消音狙撃銃だな。あ、建物の中入って行った。

ええと、ええと。先に1人入っていたのか?別行動してる奴が入口を見張ってるのか?それとも1人は完全に単独行動してるのか?

分からない、俺には目的を1つに予測することは出来ない。全部可

能性がある……

「レンちゃん、悪いけど、持久戦になりそうだ……」

10分後、なんの戦闘もなく10分が過ぎた。9回目のスキャンだ。

エムは……未だに動き続けている。敵は、少なくともリーダーはまだ目の前の建物に居る。……コレはどうしよう。あ、待て。エムがキチンと動いてるなら通信しとこう、そうしよう。

『エム、大丈夫か?』

『今になって気がついたんだが俺がリーダーをやるのはリスクが高すぎないか? 幸い敵はお前達を警戒しているのか未だに誰にも撃たれていないが』

どうやらしっかりと立ち直った様だ、コレなら大丈夫だろ。だがお前の出番はない。

『今から突撃しかけてきマース、レンちゃん待機でお願い』

『え? 本気?』

『うん』

作戦はある、万一敵が入口を見張つてても裏をつける方法が。

先ず路地裏を伝つて家の麓に行きます

入口付近に爆弾を投げます

爆発に気を取られているあいだに家の壁を駆け上がり二階の窓から侵入します。

コレで負けたらもう俺の作戦は信用しない方がいい、まあ作戦と言える程か分からんけどね。

『エムもそれでいいか?』

『……ああ、頼んだ』

いっちゃやってやりますか。

路地を伝うのに2分ぐらいかかった。まあ後は簡単だ。グレネエエエド!!

ドツドオーン

んで壁をマリ○敵に左右蹴って駆け上がった、窓枠にしがみつく。  
パリーン

部屋には居ない。ドアを開け外に出ると、同じくドアを開け外に出ようとしていた狙撃銃使いに出会う、ガタイのいい女だ。

「なっー!」

驚いたのは女の方のみ、俺は事前にイメージトレーニングをしていたので敵が持つていた拳銃を構える前に射殺だ、ふっ、容易いな。女の出てきた部屋には誰もおらず、二階にあるもう1つの部屋にも居ない。クローゼットに隠れてたりしてぶっ殺されない限りは1階に居るのだろう。

手榴弾ぽーい、ぽーい。階段の上から適当に手榴弾を投げ込む、3つだ。コレで近くに待ち構えていたとしたら無事巻き込まれ死んでいるだろう。

ガガガガガガ!!

生きてるうう! 階段横の壁を貫通してバレットラインが現れ、壁を削りながら迫ってくる。幸い俺の居る2階の床材は厚いらしく、なんとか防いでくれているらしい。そして、もうあいつは死ぬ。

ここぞと、こちらに攻め込もうとしたんだろう、階段下に顔を覗かせていた巨漢は目の前に迫るグレネードに啞然とし、吹き飛んだ。

判断ミスだったな、1度撤退すれば良かったのに。まあその場合レンちゃんが撃ってくれると思うけど。

さて、後は1人だけだな、と。次のスキャンは・・・5分後。どうするんだろ、降参してくれたら楽なんだけど。まあ取り敢えずレンちゃんと合流するか。

「すごい! アオハルさん上手いね!」

「ん、ありがとう」

でも君は俺が居なかったら1人で4、5人ぐらい倒してるんだよなあ。なんか悔しい。俺みたいなただの臆病には出来ないような真似だ。まあ、なんかその時はやたらハイテンションだったみたいだけど。

『エム、もう1人を見つけたりしたか?』



『いや、全くだな。もう街を出た可能性もある』  
マジかよ、長くなりそうだ……

その後のスキャンで草原に逃げ込んだ最後の一人と不毛な鬼ごっこをした。向こうの車はひたすらに逃げ続け、俺たちは途中で拾った四輪駆動の車でバンバン車を射撃。最後はどっかタンクに当たってちゅどーんと敵の車が吹き飛んだ、きたねえ花火だ。

CONGRATULATIONS!!WINNER LMH!

優勝おめでとうのメッセージが眼前に広がる、試合時間1時間52分で第1回スクワッド・ジャムは幕を閉じた。

## リアルの話

大会に無事優勝して、貰った景品サイン入り著書とかいうゴミを古本回収BOXに突っ込んでから数日。

「アオハルさん！今日ボス達と現実で会ったよ！」

なんて言いながらレンちゃんが見れた。誰だよボスって。あ、あのゴツイとアマゾネス達か。なんか現実で知り合いだって全書にあつたねそういや。とんでもねえ確率だな、おい。

俺がボス達のリアルの姿なんて本当は知っている筈も無いので、話を合わせねばならない。

でもなんかレンちゃんペラペラ個人情報話すね？それ本当に辞めた方がいいわ、絶対嫌われるわ。

それを伝えると、「アオハルさんは変な事しない人だって信じてるから」

と笑顔で言われた。不覚にも顔を赤くしてしまったでは無いか。

高校以前のクラスメイトと親族、二次元のキャラ以外の名前を覚えるのが苦手な俺は現実の名前を言われてもすっぱり忘れるので問題ないと言えば問題ないけどね。なんか咲って名前の人だけは覚えてたわ。

その後も一緒に遊びに行ったただの部屋に読んだのは親友除くと初めてだとか（コレ泣いた）楽しみに近況報告をしてくる。しかし度肝を抜かれたのが

「そう言えばリアルでS Jの反省会したいって言ってるんだけどアオハルさん来れる？1番私達を倒したアオハルさんから話聞きたいって」

「あ？」

何言ってるんだこいつ・・・本気で頭を心配する、ネットの知らない人に会うなんてバカじゃねえの。しかもそっち全員女だろ？有り得んわ。

そういう旨の言葉をやんわりと伝えると、

「大丈夫だって、アオハルさんはそんな事しないよ」

イラツとする、ネットで1ヶ月やそこら一緒にゲームしただけの間だぞおい。本当に有り得ない、貞操観念どうなってるの？レンちゃんもレンちゃんだけど、話を持ちかけたアマゾネスも大概だ、お前らなんか俺との交流なんてないくせに脳みそお花畑かよ。とにかく俺は絶対に反省会なんざ行かんぞ。

「ちよ、ちよつと言ひ方キツイよ・・・じゃあ、メールアドレスか電話番号とかもダメ？LINEでもいいけど」  
「ダメ」

今日はもうやる気が失せたので、ログアウトする事にする。  
「あ、待っ」

「はー、本当になんて事言ってるんだよ。無理に決まってるんだろ」

リアルに戻り、俺は溜息をつく。世間一般の常識からすると俺の反応は過敏過ぎるのかも知れないが、別に悪い事ではないだろ、交友関係なんてリアルの友人で充分だ。わざわざ遠方の何処の馬の骨ともしれない相手と交流しようなんて俺には考えられない。実の所メアド程度なら教えても良かったが、もしかたほとぼりが冷めた頃にオフ会だなんだ言われたら面倒だし、断るのにもそれなりの勇気が必要だ。完全に繋がりを排除するにはレンちゃんとも別れなければならぬが、流石にそこまですると神経質に過ぎるだろう。

ピコン、メッセージが届く。

『なんかごめん。でも皆ホントに話聞きたがってるからリアルの繋がりがダメなら、GGOで会って上げてくれない？』

うえ・・・ゲーム内だとゴツい人多くて怖いんですが・・・俺ちっちゃいしき。でもまあ、流石にこれも断ったら関係に亀裂が入るよなあ・・・

『あーうん、りよーかい、今？』

『明日の夜出来る？』

『あい』

『よろしくね』

『うい』

『・・・やっぱり怒ってる?』

『いいや』

メッセージを閉じる、文字を打つ時はどうにも単調になってしまいい、よく機嫌悪い?と聞かれる事がある。まあ機嫌悪いんですけどね、良くても変わらないって事。明日の夜か、俺そんなアドバイスなんか出来るかなあ・・・。

はい、ログインしましょー。

今回は先にレンちゃんを待ち合わせをし、連れていってもらう。場所はアマゾネス達のホームのようだ。

成程、自分の陣地へと連れ込みペースを握るつもりか。策士だな。

「なんか適当な事考えてるよね?」

「何でバレるんすか?」

おかしいなあ、顔に出るタイプでも無いのに。

少し街の中心部からは外れた場所に、そのホームはあった、まあ可愛らしい。

薄いピンクの屋根に白い木造の壁、庭付き一戸建て住宅だった。流石リアルが女子高生なだけはあるな。

「あつ、来たよー」

入口にたっていた銀髪のサブマシンガンの人が出迎えてくれ、中に入る。うおつ

中に入った瞬間ゴツい三巨頭が目に入りビクツとしてしまった。もうちよい可愛いアバターに交換しようとか思わなかったのかい? 金掛かるけどさあ。

家の中も存外女の子らしい風で、まあ普通。

「じゃあ、先ず自己紹介からしよっか」

レンちゃんが音頭を取り、自己紹介が始まる。

リーダー的存在な三つ編みの人がエヴァ。VSS消音狙撃銃とハンドガンを持つてる。

サブリーダーで丸っこいアバターの人がソファイ、Pなんちゃらマシガン使い

先日の大会で最後まで逃げてた日本人風のアバターの人がトーマ、ドラグノフ狙撃銃使い。俺のPSLの兄弟みたいな銃だな。

1つ目のグループに居た赤毛のマシガン使い、ローザ。

同じく1つ目のグループの金髪狙撃銃使い、アンナ。

最後に一番最初に倒した銀髪の子マシガン使いのターニャ。

「悪いけど今日明日で覚えられるかは分らんわ、取り敢えず俺はアオハル。メインウエポンはMx4とPSL狙撃銃。ステータスは敏捷と筋力振りだな。まあ、よろしく?」

俺の自己紹介が終わった所で、反省会が始まる。科学の発展は凄いもので、ゲーム内でテレビを見ることも出来るのだ、部屋に置いてあるテレビをつけ、SJのカメラ映像を映す。我らLMHとSHINCの戦いの場面を撮っている部分らしい。

一つ一つ、アドバイスをして行く。と言っても俺だっこのアドバイスで正しいのかとか分からんけどね。

エム連れてきた方が良かったんじゃねーかなー……。

反省会を終わらせ、レンちゃんを置いて家を出た、話すことも無いし。女の子が居ると緊張するって訳でもないけど流石に場違い感半端ないわ